

## 東京音楽大学付属民族音楽研究所刊行物リポジトリ

Title	那覇市大嶺の「地バーリー」と御冠船における爬龍船競漕の関係
Title in another language	On Rowing Performances on Land: the Relationship between the Coronation Events in the Kingdom of Ryukyu and the Rowing Event in Omine Village
Author(s)	金城 厚 (KANESHIRO Atsumi)
Citation	伝統と創造=Dento to Sozo, Vol. 12, p. 33-40
Date of issue	2022-03-30
ISSN & ISSN-L	Print edition: ISSN 2189-2350, Online edition: ISSN 2189-2482, ISSN-L 2189-2350
URL	<a href="https://tcm-minken.jp/publication/IE_B12202203.pdf">https://tcm-minken.jp/publication/IE_B12202203.pdf</a>

# 那覇市大嶺の「地バーリー」と御冠船における爬龍船競漕の関係

## On Rowing Performances on Land: the Relationship between the Coronation Events in the Kingdom of Ryukyu and the Rowing Event in Omine Village

金城 厚 KANESHIRO Atsumi

沖縄各地では、毎年5月に、航海安全やムラの繁栄を祈って爬龍船競漕（ハーリー）が行われている。ところが、那覇市大嶺では「地バーリー」と称して、陸上で模擬的に舟を漕いで進む様子を表現するパフォーマンスを行っている。なぜ、陸上で演じるのだろうか。

琉球王国時代、国王の即位を認証する中国の使節をもてなすために、首里城そばの龍潭池で爬龍船競漕を行うことが恒例となっていた。その準備のために、那覇から5 km 離れた丘の上の龍潭池まで、三艘の爬龍船を大勢の人々の手によって運び上げなければならなかった。その際、舟をエスコートする船乗りたちが旗を掲げ、歌を歌い、ドラを打ち、多くの人々が見物に押し寄せ、盛大なパレードとなった。

こうしたかつての華やかな爬龍船陸送のパレードを記憶に留めるために、芸能としての地バーリーが生まれたと推測する。

キーワード: 沖縄 Okinawa、ハーリー dragon boat race、  
歌 folksong、重陽宴 diplomatic banquet

### 1. はじめに

沖縄県内の各地で行われる爬龍船競漕（通称「ハーリー」）という行事は、一般にはボートレースとして知られている。例えば、最も有名な爬龍船競漕「那覇ハーリー」は、毎年、新暦の五月上旬の連休に那覇の港で儀礼を行ったあと、旧那覇市街を構成する那覇・久米・泊三地区の対抗戦としてレースが行われている。糸満などでは旧暦の五月四日に実施している。その他の地方では、夏の豊年祭や海神祭の一環として競漕する地域もある。

歴史的には、琉球王国時代、新国王認証のため中国から皇帝の使者・冊封使を迎えて儀礼および謝宴を行う「御冠船」の一環として、首里城そばの龍潭池で行われた爬龍船競漕が知られている。泊村、那覇村、久米村の龍舟三艘を並べて、国王、冊封使らに漕航のパフォーマンスや祝賀の歌を披露する国家的イベントである。

爬龍船競漕は一般に、海上の舟でパフォーマンスを披露する芸能として知られている。本稿ではこれらを「海のハーリー」と総称しておく。従来の研究のなかで、「海のハーリー」で歌われる歌については、王耀華氏による詳しい研究があり<sup>1</sup>、冊封の謝宴の時の爬龍船競漕については、麻生伸一氏による詳しい研究がある<sup>2</sup>。

ところで、那覇市の泊、また、小禄地区の大嶺、さらに浦添市の小湾では、海辺の集落なのに、わざわざ陸上で、爬龍船を漕ぐ仕草を披露する芸能を伝えている。泊と大嶺では「地バーリー」と呼び、小湾では「アギバーリー」と呼んでいる。本稿では「陸のハーリー」と総称しておく。この中で、とりわけ泊は実際に海のハーリーを毎年実施しているのに、

なぜ、わざわざ陸上で「まねごと」をするのだろうか。

本稿は、まず、那覇市大嶺に伝えられている民俗芸能「地バーリー」の歌詞、芸態と音楽を紹介し<sup>3</sup>、これが一般的な「海のハーリー」や、御冠船における龍潭池の爬龍船競漕とどのような関係にあるかを考察する。

## 2. 大嶺の「地バーリー」

沖縄各地の爬龍船競漕すなわち「海のハーリー」の多くは旧暦五月四日（通称：ユッカヌヒー）あたりに行われるが（那覇港のみ新暦）、那覇市の大嶺では、この旧暦五月四日に恒例として、大嶺公民館の会堂内で「地バーリー」が演じられる。公民館のなかった戦前は、浜の砂地で演じていたというが、いずれにせよ、那覇港など他地のよく知られた「海のハーリー」の光景とは異なり、わざわざ陸上で演じるところが「奇異」であり、興味をひく。2001年に那覇市無形民俗文化財に指定されている。

大嶺の「地バーリー」は、船首側に鉦打ち1人と歌い手1人が後ろ向きに座り、前向きに漕ぎ手（加子または水手：かこ）が左舷側・右舷側に5～6人ずつ並び、最後尾に楫取が立つとともに、間に旗持ちも2～3人立って、歌い手の声や鉦打ちの合図に合わせて舟を漕ぐさまを演じる芸能である。

音楽的には、歌い手と漕ぎ手とが音頭一同形式で歌い進める。すなわち、音頭となる歌い手がやや自由なリズムで朗々と琉歌（8・8・8・6字）を歌い、これに漕ぎ手一同が掛け声で囃す。また、鉦打ちが区切りを示すように銅鑼を打つ。これが「ハーリー歌」である。加えて興味深いことに、歌の合間に、鉦の音で拍子を取りながら、漕ぎ手一同が掛け声とともに櫂で漕ぐ動作をするが、鉦打ちの合図一つで漕ぎ手たちが一斉に漕ぐテンポを変化させる部分があり、歌と共に「地バーリー」の醍醐味となっている。この意味については後ほど検討したい。

大嶺では、泊舟・那覇舟・久米舟の三艘を並べた隊形で順次演じる方式と、一艘だけで演じる方式とがある。三艘の方式では、泊舟が漕航のさまを演じつつ二首歌い、次いで那覇が同様に二首、また、久米舟が二首演じたあと、さらに久米舟の乗組員が大嶺舟として二首演じる。舞台上演するときには一艘の方式となり、一グループで全部の歌を順に通して歌う。

久米舟の乗組員が大嶺舟を演じることには由来があるという。元々、大嶺は漁業者が多く、サバニ（小型の舟）を操ることに長けていたが、市街地である那覇の三地区では、那覇ハーリーの時に「漕ぎ手がいなくて近隣の漁村に漕ぎ手の応援を求めなければならない状態であった為、（大嶺の漁民は）久米舟の漕ぎ手として参加した」という<sup>4</sup>。すなわち、那覇ハーリーにおける久米舟の漕ぎ手は、実質的に大嶺の人が多かったらしい。このような縁によって、久米舟を使って大嶺舟の歌を歌うことにしているのだという<sup>5</sup>。

大嶺の「地バーリー」で歌われる琉歌は、以下のとおりである。四つの部分があり、それぞれ泊舟、久米舟、那覇舟、そして大嶺舟の歌唱者が、各地区にちなんだ琉歌を二首ずつ歌う。いずれも航海安全、漕航の順調、国家安泰を予祝する祝賀の内容であるが、一部には世俗的なはやり歌が導入されている。なお、反復句の「へんさー」とはハヤブサのことで、優れた船に対する美称とされる。

## 《大嶺の地バーリー》

### 一、泊舟

- 1 くぬからがやゆら またいちえがすゆら ハリとうまいぬ へんさーよ  
 きゆぬんじたちや さだみぐりしゃ ハリとうまいぬ へんさーよ  
 (これきりだろうか、また会えるだろうか、今日の出航は日取りが難しい)
- 2 とうまいたかはしに なんじゃじーふあうとうち ハリとうまいぬ へんさーよ  
 いちがゆぬあきてい とうみていさすら ハリとうまいぬ へんさーよ  
 (泊の運河の橋から銀の簪を落としてしまった。何時になるだろうか、夜が明けて探して頭に挿せるのは)

### 二、久米村舟

- 1 いしなぐぬいしぬ うふしなるまでいん ハリくにんだ へんさーよ  
 うかきぶせみしより わうしゆがなし ハリくにんだ へんさーよ  
 (小さな石が大きな瀬になるまで、お治めください、わが国王様)
- 2 くにんだぬふにぬ とうみぐしくぬぶいヨ ハリくにんだ へんさーよ  
 ゆがふくじうきてい うがでいしりら ハリくにんだ へんさーよ  
 (久米村の舟が豊見城の拝所に登り、豊年の神籤を戴いて拜んで新生しよう)

### 三、那覇舟

- 1 ななぬちよーでーするてい しゅんじゃなしめでい ハリなふあぬ へんさーよ  
 んじたちぬちわやヨ さびんねらん ハリなふあぬ へんさーよ  
 (七人の兄弟が揃って、首里の王様の御用を受け、出発の際はサビク障りがない)
- 2 なふあむらぬふにぬ とうなかぬいんじていヨ ハリなふあぬ へんさーよ  
 なみんうしすいてい はるがちゅらさ ハリなふあぬ へんさーよ  
 (那覇村の舟が沖に乗り出すと、波をかき分けて走る姿が美しい)

### 四、大嶺舟

- 1 だんじゅうふんみぬ むらぬさかゆしや ハリうふんみ へんさーよ  
 うふぐしくくさてい ゆにぐわめーなち ハリうふんみ へんさーよ  
 (まことに大嶺村が栄える訳は、大城を背に与根村を前にしているからだ)
- 2 だんじゅうとうゆまりぬ うふんみぬむらやヨ ハリうふんみ へんさーよ  
 すだちわかむんぬヨ なたぬちゅらさ ハリうふんみ へんさーよ  
 (まことに名高い大嶺村は、成長した若者の並んだ姿の美しさよ)<sup>6</sup>

大嶺の「地バーリー」の歌詞は、那覇ハーリーに参加する三つのムラ（泊、久米、那覇）を題材に、それぞれのムラを讃美し、慶賀する歌詞や、航海の順調、すなわち航海安全を予祝する琉歌を連ねている。そして、最後は自分たちの大嶺ムラを讃える歌詞を歌っている。これらの歌は那覇港で行われる爬龍船競漕の前に歌われているハーリー歌の歌詞と概ね同様であり、いずれも爬龍船競漕が祝儀として行われるという本旨を窺わせる。

歌の旋律は琉球音階で、音楽面でも那覇港で演じられる海のハーリー歌とよく似ている。リズムの「間」がやや揺らいでいること、フシ回しに若干の変形が伴うことなどの特徴があるが、これはどこまで古形を留めているかどうか分からないが、独唱曲として発展して

いるようにも感じられる。

一方、鉦打ちと漕ぎ手の掛け声による漕航の部分を見ると、テンポ速い部分とゆっくりとした部分とに分かれている。これらが鉦打ちの号令一下で急-緩-急-緩....と切り替えられるところに面白さを感じるが、これは一体何を意味するのだろうか。

想像に留まるが、大型船が出入りする那覇港では、大型船の接岸・離岸を安全に制御するための曳舟（タグボート）の役割が重要である。そのため、曳舟には、力強く漕いだり、ゆっくりと抑制したりというギアチェンジの技術と、統制のとれたチームワークが必要である。鉦打ちの号令一下、さまざまな掛け声と櫂のテンポを使い分ける「地バーリー」の演技は、こうした曳舟技術の訓練の披露となっていたのかも知れない。

なお、「地バーリー」の起源については、ほとんど分かっていない。大嶺地区での言い伝えでは、大嶺の地バーリーの始まりは明治20年（1887年）頃、那覇ハーリーの様子を持ち込んだという。しかし、これには疑問がある。

大嶺の人々は、久米の海上ハーリーを代行するなどした縁で、久米村からハーリー歌などを受け入れたと思われるが、久米も那覇も通常の海上での競漕は行っているものの、陸上でのハーリーの伝承はない。泊だけは「地バーリー」を伝えているが、その始まりとしては、1922年に行ったと伝えている。また、小湾の「アギバーリー」も1915年に大正天皇即位奉祝として始まったと伝えている。海上ハーリーは古くからの伝統だが、陸上のハーリーの起源は、大嶺が最も古いことになるのだろうか。むしろ、王国時代においてすでに「地バーリー」はいくつかのムラで共有されていたのではないか。

### 3. 琉球王国における爬龍船競漕

琉球王国時代、泊・那覇・久米三地区の対抗戦として行われた爬龍船競漕は、豊見城から今の那覇港に至る国場川河口域で行われたとみられる。おそらくこれが正統的な爬龍船競漕と思われる。これとともに歴史上重視されているのが、首里の龍潭池で行われた御冠船の爬龍船競漕である<sup>7</sup>。中国からの冊封使を迎えて行われる御冠船行事では、首里城の下にある龍潭池に三艘の龍舟を浮かべ、高貴な家庭の子供たちが乗り込んで、漕ぎながら太鼓を打ち、歌を歌い、これを国王や冊封使らが棧敷席から見物する、という行事が恒例として行われていた。

例えば、1683年、尚貞王冊封のため来琉した汪楫の使録『使琉球雜録卷三』には、重陽宴に際して、爬龍船競漕が行われたことを次のように記述している<sup>8</sup>。

設棚列幃具榼王迎兩使臣小酌棚下傾国士女聚觀皆趺坐水口潭有小舟三首尾略作龍形舟列童子二十餘皆朝臣子弟披紅簪花兩人擊鼓為蕩槳之節餘皆唱歌歌曰……」

[意訳] 仮屋を設け、幕を巡らし、酒食を用意する。国王は正副冊封使を迎え、仮屋に小宴を設ける。国じゅうの男女が集まって見物し、畔に座る。龍潭には小舟が三艘浮かび、舳先と艫に龍形を作る。舟には二十人余りの少年「童子」が並んでいる。いずれも高官の子弟で、赤い衣を着て髪に花を挿している。二人

が太鼓を打ち、漕航の歌を歌う。歌詞は……」

本来の「海のハーリー」では屈強な海の男たちが漕ぐのであろうが、龍潭池で冊封使に見せるための爬龍船競漕は、それとは異なり、色鮮やかな衣裳を身にまとった子供たち、しかも、高位高官の家庭の子供が船上で演技・演唱を行うことが、国王や冊封使たちを喜ばせると考えられているのである<sup>9</sup>。そのような子供たちが、皇帝の徳を讃えて謝恩の歌を歌うことこそが、御冠船の宴の最大の目的に寄与することなのである。汪楫は前文に引き続いて、彼が聞いた歌詞は次のようであったと記述している（部分）。

三龍舟池中游彩童歌唱報重恩  
鳳皇臺上鳳皇游天朝仁如海深  
琉國歌唱報重恩忠敬兩字萬世心（以下略）

〔歌意〕三隻の龍舟は池に遊び、着飾った子供たちはご恩を讃え歌う。  
鳳凰は台上に羽ばたき、中国皇帝の仁徳は海より深い。  
琉球の歌はご恩を讃え歌い、「忠敬」の二字の心は万年までも。

#### 4. 爬龍船の陸送

では、王国時代に、陸上で爬龍船のパフォーマンスは行われたのだろうか。まず、爬龍船競漕全体が王府内でどのように扱われていたかがわかる史料が、尚家文書の中にある。『冠船爬龍舟方日記』という史料で、1838年尚育王を冊封する御冠船の重陽宴において、首里城そばの龍潭池で行われる爬龍船競漕を中心に、その準備や人事、調達までのマネジメントの全てを取り仕切った臨時の役所「冠船爬龍舟方」の業務日誌である<sup>10</sup>。

この日誌は、前述の重陽宴に関係する記事が多いのはもちろんであるが、そのなかでも特に注目されるのは、那覇の港にある龍舟を首里の龍潭池まで陸送した記録である。重陽宴のためには、龍舟を首里まで陸送しなければならない。しかも、陸上では、舟はかなりの大きさと重量があり、5km以上離れた丘の上にある首里まで運ぶのは、かなり大がかりな作業である。組織動員体制も必要だし、物珍しいことであるから、一般の人々も見物に詰めかけて、さぞや大きなイベントになったことだろう。

『冠船爬龍舟方日記』の五月六日の条には、同日の陸送のありさまが次のように記録されている。

五月六日爬龍船三艘首里持登付、三平等村夫役にて卯時罷下、各爬龍船当并所士百姓守護にて持登候付、太子様大美御殿江御光駕被遊御見物候段、当日朝御近習より御通達有之。

右付爬龍船三艘江梶取老人・鐘打老人・旗振三人完乗付、加子之者共者舟左右之通よりおやく持現場漕候真似にて爬龍船歌おたひ小印等備ひにぎやかに、下綾門より松崎江持越候事。

[意訳] 五月六日、爬龍船三艘を首里まで運び上げるために、首里地区の役人が、予め定めてあった者どもを引き連れて、日の出時に那覇へ下り、三艘それぞれの管理人とムラの人々が警護のもとに運び上げる際に、太子様（世継ぎの子供）が大美御殿（首里の入口・中山門のそばにあり、王族の女性などのための別屋敷）にいらっしゃってご見物なさるといふ旨、当日の朝、御近習から通達があった。そのため、爬龍船三艘に楫取1人、鉦打ち1人、旗振り3人ずつ乗り込んで、漕ぎ手らは舟の左右を歩いて櫂を持ち、海で漕ぐまねをしてハーリー歌を歌い、小旗などを備えて賑やかに、中山門から松崎（龍潭湖畔）まで持って来た。

この史料にある陸送プロジェクトが実施されたのは1838年、戌の御冠船の年の五月六日である。五月六日と言えば、五月四日が「海のハーリー」の本番なので、ハーリー直後の興奮冷めやらぬ時期、ということになる。首里の男たちが大勢、王府の命令で駆り出され、那覇・泊・久米の各村々の爬龍船を大勢で担いで、首里の坂道を登って龍潭池まで持ち上ったのである。

その際は、那覇ムラ・泊ムラ・久米ムラそれぞれの爬龍船を漕ぐはずの船乗りたちがそれぞれの爬龍船をエスコートして、旗を掲げ、ドラを打ち、ハーリー歌を歌いながら櫂を漕ぐ仕草などをして氣勢を上げたという。この史料に描かれている光景は、現在の「地バーリー」の姿に酷似しているではないか。

この賑やかなパレードを一目見ようと大勢の人々が詰めかけたであろう。幼い太子までもがこれを見たいというので、行列の通る首里綾道に面した大美御殿に来て見物したと記録されている。太子の来臨については、日記には当日朝いきなり仰せつかったハブニングのように書かれているが、これだけの支度は当日朝だけでは無理であろう。実際は準備期間があっただろうし、もしかすると恒例となっていたのではないだろうか。近世の公的記録では、「御所望」と記録されていても、実は「恒例」となっていたことが少なくない。

大きくて重たい爬龍船を担いで延々二里、首里の坂を上っていくのは並大抵の苦労ではなかっただろうと思われる。もっとも、数十年に一度の御冠船の大イベントであるから、首里の人も、那覇の人も、大いに盛り上がっていたのではないだろうか。そうした中で、市民が大勢参加しての爬龍船陸送であるから、まるで祭りのような騒ぎになっていたに違いないと想像する。

## 5. 結論と展望

那覇市大嶺の「地バーリー」は、琉球王国時代の御冠船行事のひとつ、重陽宴で用いる龍舟を海辺の那覇から首里の丘まで、5km余り陸送した大イベントにちなんで、これを記念し、記憶にとどめるために行事化したと思われる。ちなみに、浦添市小湾の「アギバーリ」は、集落内を道ジュネー（行列）することになっている。また、泊の「地バー

リー」については、爬龍船を車両に乗せて国際通りをパレードしたこともある<sup>11</sup>。これこそ、重陽宴で首里の龍潭池まで爬龍船を陸送した行列を思いおこさせるものだと言えよう。

ところで、本番の重陽宴では、三艘の爬龍船は競漕したことになるが、龍潭池は小さな池であり、スピードが出せる広さは無い。おそらく、「競漕」は速さを競ったのではなく、船体の華麗さを、あるいは歌声の美しさや操船の優雅さを競ったのではないだろうか。つまり、重陽宴の爬龍船競漕の実態は、スピード競漕はなく、緩やかに池の中を巡ったと考えられる。

そして、最も重要なことは、重陽宴の龍舟の上で歌を歌ったのは、位の高い、家柄の良い少年たち、つまり若衆であった。彼らの歌った歌は、国王の長寿を願い、国の繁栄を祈り、舟が順調に走ることを述べ、冊封使の帰りの航海安全を願う内容であった。ただし、1838年の「戌の御冠船」ともなると、漕ぎ手の多くは成人した中堅の青年の士であったようだ。御冠船踊においても同様で、冊封使に対しては「若衆」すなわち高貴な身分の童子が演じていることを標榜するものの、時代が下るにつれて少しずつ、実力ある青年に役を置き換えていく傾向が見られる。

いずれにせよ、重陽宴での爬龍船の目的は、スピードを競って楽しむことではなくて、何よりも、冊封使に王国貴族の子供たちの歌を聴かせ、龍舟が穏やかに順調に走る様を演技として見せて、冊封使の航海安全を予祝することに最大の目的があった、ということに尽きるだろう。

ただし、御冠船の諸芸能は冊封使のためのものであって、それらを鑑賞できるのは王族や使節団員、そして、ごく少数の高位の官吏たちだけに過ぎなかった。それ以外の一般の士、百姓らはすべて御冠船の諸芸能を見る場は無かった。そこで、御冠船のハーリーを実質的に支えた海の若者たちは、王族や使節の前で演じた栄誉を大勢の一般大衆の前で誇るべく、爬龍船の陸送を賑やかに演出したのであろうし、その記憶が「地バーリー」を生み出したのだろう。

本稿は、那覇市大嶺に伝わる「地バーリー」、ひいては泊の「地バーリー」や浦添市小湾の「アギバーリー」の起源が御冠船のイベントにあった、という解釈を提案するものである。

注：

- 1 王耀華、1988年
- 2 麻生伸一、2020年
- 3 本稿の根拠となった大嶺の「地バーリー」の演唱は、CD集『沖縄の古謡』（注6参照）に収録されており、その録音当日には筆者も調査委員として立ち会った。
- 4 字大嶺向上会、2008年
- 5 現・大嶺向上会長金城重光氏談（2023年2月）。
- 6 沖縄県文化振興会、2012年
- 7 上江洲安享、2000年
- 8 原田禹雄、1997年。引用は同書所収の写真版に拠った。不明な字は□で示した。

- 9 金城厚、2014年
- 10 那覇市歴史博物館所蔵『尚家文書79』。この史料の内容をご紹介くださったのは麻生伸一氏である。記して感謝したい
- 11 2022年11月、焼失した首里城の再建が開始されるにあたって、正殿の象徴となる主要な「梁」とするための木材を運ぶパレードが盛大に実施された。そのパレードに各地の爬龍船も加わった。

参考文献：

字大嶺向上会．

2008 大嶺の今昔（改訂版）．那覇：大嶺向上会．

麻生，伸一．

2020 近世琉球における冠船ハーリーの諸相 —1838年を中心に—．沖繩芸術の科学．32, 51-75.

上江洲，安享．

2000 爬龍舟競漕に興じる人々たち — 近世末期の爬龍舟競漕における準備体制・役割分担について —．沖繩文化研究．26, 137-184.

王，耀華．

1988 『爬龍船』（ハーリー）と『龍船歌』（ハーリー歌）．沖繩文化研究．14, 329-355. 沖繩県文化振興会編．

2012 沖繩の古謡 沖繩諸島編上巻～南部～．(OCPF-14)．(公財)沖繩県文化振興会．

金城，厚．

2014 『冠船躍』とは何か —— 冊封使録から見る琉球舞踊の成立．沖繩文化．115, 1-18.

原田，禹雄．

1997 汪楫 冊封琉球使録三篇．榕樹書林．

Every May in Okinawa, dragon boat races are held to pray for safe voyages and the prosperity of villages. However, in Omine, Naha City, there is a performance that simulates rowing a boat on land. Why do they want to perform on land?

During the Ryukyu Kingdom era, it was customary to hold a dragon boat race at Ryutan Pond near Shuri Castle in order to entertain Chinese envoys who authenticated the enthronement of the king. In order to prepare for it, a large number of people had to carry three dragon boats up to Ryutan Pond on a hill 5 km away from Naha. At that time, the sailors who escorted the boat raised flags, sang songs, played gongs, and many people flocked to the sights, making it a grand parade.

It is speculated that the land rowing as a performing art was born in order to remember such a gorgeous parade of land transportation of dragon boats.

(東京音楽大学付属民族音楽研究所教授 民族音楽学)